

Title	Analysis on Self-presentation Behaviors for Audience in Online Social Networks
Author(s)	富永, 登夢
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/72277">https://hdl.handle.net/11094/72277</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 富 永 登 夢 )

論文題名

Analysis on Self-presentation Behaviors for Audience in Online Social Networks  
(オンラインソーシャルネットワークにおける聴衆に向けた自己提示行動の分析)

## 論文内容の要旨

本論文は、OSNユーザの自己提示行動の分析に取り組んだ。特に、聴衆に由来するリスク対処と印象操作のバランスの観点から自己提示行動を理解し、その上でその支援技術の設計指針について提案することを目的とする。本研究では、リスク対処と印象操作に着目し、自己提示行動を自己開示（名前や顔写真など個人特定性のある情報の開示）と自己表現（意見や感情など自身の内面に関する表現）の2つの側面に分けて調査と分析を実施した。

まず、聴衆由来のリスクに対する認識（匿名性意識）の高さを322名のユーザから質問紙調査で取得し、彼らのOSN上での自己開示に関する実行データとの関係を調査した結果、匿名性意識の高さと実名の開示の間に負の相関が確認された。当分析は、アメリカ、インド、及び日本のユーザを対象に実施したため、得られた知見は文化的背景に依存しない可能性がある。

次に、聴衆との関係性や反応と自己表現の性質との関係を分析した。500ユーザによる1479件の投稿データから、実世界ではなくOSN上で頻繁にやり取りする相手に自身のネガティブな情報を共有しようとする傾向にあることが分かった。また、1618ユーザの約500万件の投稿データから、聴衆全体と密な繋がりを持つようになり、聴衆からのポジティブな反応が減少したりすると、ユーザが共有する情報は徐々に神経質になっていくことが時間縦断的分析から明らかになった。

我々の知見は、聴衆に対する認識、聴衆との関係性、聴衆の反応や構造によって自己提示行動は変化することを示す。これは、人の行動と経験の関係性を定量化するものであり、“人の行動は経験にどのように依存するか”という学術的示唆のある疑問に1つの解を与える。また、従来の行動学や心理学では達成できなかった規模での分析から得られたこれらの知見は汎用性が高く、計算機によって人の行動を支援する情報空間を将来的に設計する上で有用である。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 富 永 登 夢 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 原 田 研 介
	副 査 教 授 石 黒 浩
	副 査 教 授 佐 藤 宏 介
	副 査 准教授 土 方 嘉 徳 (関西学院大学商学部)
<b>論文審査の結果の要旨</b>	
<p>本論文は、オンラインソーシャルネットワークにおける、自己提示行動に関するリスクと印象操作を調べたものである。研究の目的は、オンラインソーシャルネットワークを利用するための支援技術を開発したり、オンラインソーシャルネットワーク自体の設計指針を与えたりすることにある。主査、副査で論文の審査をおこなった結果、いくつかの疑問点が挙げられた。それらは主に、この研究全体で初めて分かったことはなにか、本研究の貢献はなにか、研究自体に潜むリスクはなにか、などであり、また論文の著述の不明瞭さに関する指摘も行われた。審査の際に出た疑問点に関する議論を中心に、最終審査をおこなった。最終審査では富永君は全ての疑問に明確に回答した。これにより、主査、副査全員一致で、本論文は博士（工学）として価値があるものと認められた。</p>	